

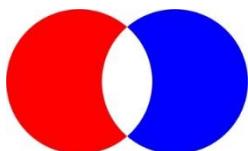
日韓市民ネットワーク・なごや

한일 시민 네트워크·나고야

Home Page : <http://www.nikkannet.jp/>

発行者：後藤 和晃
〒483-8037 愛知県江南市勝佐町東郷 238
TEL/FAX 0587-56-6788

朱色



目次

| | | |
|-------------------|------|--------|
| P 1 事務局通信 | 統括幹事 | ： 後藤和晃 |
| P 2 会の活動報告とお知らせ | 事務局 | ： 後藤 他 |
| P 4 高句麗・旧満州国紀行感想文 | 会員 | 9名 |
| P 16 史跡紀行・俳句 | 会員 | 4名 |
| P 19-20 トピックス・後記 | 事務局 | ： 有志 |

事務局通信

사무국 통신

歓迎！第7次光州学生交流団
～8月2日（木）～6日（月）～

日韓市民ネットワーク・なごやにとって、例年、夏は韓国から学生訪問団を迎える「交流の季節」です。ことし訪れて来るのは韓国南西部の中核都市、光州からの学生集団です。彼らは2000年に名古屋に来たのを皮切りに以後、1年置きに来訪を重ね、今回で7回目となります。

光州学生交流団の5回目の来日をめぐる危機的状況は、今も私たちの記憶に鮮明に刻まれています。あの夏、日韓双方のノボ骨にささったままになっている竹島（韓国では独島）の帰属問題で、韓国では嫌日世論が沸騰し、予定されていた120件もの日韓交流行事の殆どが中止に追い込まれていました。そんな逆風の中



でも学生訪問団の取りまとめ役の光州YMC Aは「今、ここで日韓市民ネットと永年続けてきた交流を打ち切らなければならない理由はない！」と敢然として交流団の派遣を決定されました。私たちに対する光州YMC Aの熱い信頼と友情に応えるべく、今年も心に残る交流を繰り広げたいと考えています。

現在、想定されている交流団の規模と日程は次のとおりです。

交流団の規模 16人程度

（内訳 学生13人、付き添い3人）

日程（予定）

- 8月2日（木）光州 → 仁川発 → 中部国際空港着 → バスで奈良へ → 法隆寺見学： 奈良ユースホステル泊
- 8月3日（金）ユース発 → 平城宮跡（朱雀門・大極殿）→ 昼食 → 東大寺（二月堂・大仏殿）
→ 名古屋へ → 18:00前後 名古屋国際センター着 : ホスト宅泊
- 8月4日（土）ホストと一日自由 : ホスト宅泊
- 8月5日（日）自由行動後、16:40 名古屋韓国学校に集合
17:00～19:00 交流パーティ終了後 清掃・解散 : ホスト宅泊
- 8月6日（月）9:50までに中部国際空港に集合・見送り

交流団の奈良旅行にご支援を!!

会の設立以来、名古屋を訪れた交流団に対して私たちの団体は必ずバスを利用しての奈良一泊旅行をプレゼントしてきました。およそ 20 数万円を要する奈良旅行のプレゼントがこれまで毎年、実施できたのも会員の皆さんのご支援（寄付）の賜物でした。光州交流団の 7 回目の奈良旅行を実現するためにも会員の皆さんのご理解とご支援を心からお願ひします。

ここで、なぜ奈良旅行のプレゼントに、こだわってきたかについて（事情に詳しくない方々に）ご説明します。一言でいえば、日本の奈良には、韓国では全く見るよすがない、1200 年前の仏教華やかなりし頃の古代朝鮮の面影が息づいているからです。日本が誇る世界最古の木造建築物である法隆寺の堂塔も、仏像群も、飛鳥時代に朝鮮から渡來した工人たちの手によって生み出されました。一方、東大寺大仏殿の巨大な建物も大仏像も渡來人の子孫たちの技によって花開いた傑作でした。いずれも日本の貴重な文化財であると同時に、韓国・朝鮮の人々にとっても、古代朝鮮の華麗な仏教文化の輝きを今に伝える文化遺産であるとも言えるのです。

会の活動報告とお知らせ

모임의 활동 보고와 통지

水崎翁追慕祭が開かれました

～ 大邱市寿城区・寿城池～

この 6 月 14 日、韓国大邱市の寿城区にある寿城池のほとりで、大邱農民の恩人と言われた水崎林太郎翁の追慕祭が、例年より 2 ヶ月遅れて開かれました。追慕祭が遅れていたのは、墓を守っている徐彰教（ソ・チャンギョ）さん（80 歳）の体調が春先、すぐれなかつたことが原因でしたが、この日は元気な顔を見せておられました。式典には釜山の日本総領事館から余田（よでん）総領事夫妻が出席したのをはじめ、地元寿城区の李振勲区長や徐さんの学生時代の同級生だった、元駐日韓国大使の吳在熙さんなど 40 名が参加していました。名古屋からは事務局の後藤和晃と鈴木幸之助の 2 人が出席しました。

追慕祭の主人公、水崎林太郎翁は岐阜市出身で大正時代に新天地を求めて、大邱に移住してきました。彼は日照りと洪水に悩まされている大邱の朝鮮人農民の困窮ぶりを見て、農業用貯水池造成の必要性を痛感したといいます。

彼は敢然として京城（現ソウル）の朝鮮総督府に赴き、貯水池造成の必要性を力説します。そしてついに多額の資金を引き出し、10 年がかりの大工事の末、昭和 8 年（1933 年）頃、寿城池を完成させ、その満々たる水によって 280 万坪もの美田の開拓に成功したのです。水崎翁は昭和 14 年（1939 年）に世を去るにあたって、自分の墓は池のほとりに営むよう遺言しました。遺言を守って池の脇に墓をたてた息子たちは、昭和 20 年の日本の敗戦で岐阜に引き上げて行きました。

これまで奈良旅行を果たした交流団の学生たちは 1200 年以上も昔の建物や仏像群が今日まで守り伝えられてきたことや、街の中で放し飼いの鹿の群れと市民の暮らしが両立している事実に驚き、日本人や日本文化を再認識するきっかけとしました。今回の交流団の学生たちにも、こうした体験をぜひ味わって欲しいと思います。会員の皆さん方のご支援をよろしく、お願いします。ご芳志は同封の振替用紙を使い、郵便局から会の口座にお振り込み下さい。

なお、8 月 5 日（日）17:00 からの名古屋韓国学校で行う交流パーティにも、会員の皆さんができるだけ多く参加され、光州の学生たちと交流を深めていただくようお願いします。交流パーティの参加費も先述の振替用紙で、同時に振り込んでいただければ幸いです。なお、振替用紙を無くされた方は、下記の郵便振替・口座名と口座番号でお送りください。

口座名：日韓市民ネットワーク・なごや
口座番号：00830-4-36485
参加費用：成人 3,500 円 学生 2,000 円



その後は水崎翁と力を合わせ寿城池の造成に尽力した、徐寿仁（ソ・スイン）さんとその息子さんたちが 70 年もの歳月の間、墓を守り続けているのです。

今回の追慕祭では徐一族の当主で“水崎さんの墓守り”と自負している徐彰教さんを喜ばせる動きが二つありました。

その一つは追慕祭を共催した寿城区の李振勲区長のある決意表明でした。李区長は

「水崎翁と池の間に立ちはだかるように存在しているバドミントンの練習場を、必ず他の場所に移し、墓地にふさわしい環境を整えます！」と宣言したのです。

徐さんは大喜びで

「水崎さんは、あの世に行っても寿城池の姿を見続けたいと池の辺りに墓を造らせたのです。練習場が他所に移れば、墓から池がよく見えるようになります。早くそうしたいです！」と語っていました。

二つ目の嬉しい事は、寿城区の名所案内のルートに水崎翁の墓地も含まれることになり、“ストーリィ・テラー”と呼ばれる案内役の人たちが、日本人水崎林太郎の業績を学び、語り始めたことです。追慕祭の日も式典の直後にストーリー・テラーの一人の女性、チヨン・ギヨンシルさんが、集った市民たちに水崎翁が寿城池を造るために、いかに奮闘したかを表情豊かに説明していました。大邱に20年以上、通っている事務局の後藤も、徐彰教氏以外の人が水崎翁の業績を堂々と語っているのを見るのは初めてで、強い印象を受けました。水崎翁亡き後、徐さんの一族が70年にわたって墓を守り、その業績を伝えてきた努力が今、



熱弁をふるう寿城区長

やっと実り始めたのではないかと思いました。

高句麗・旧満州国紀行を実施

日韓交流史講座の高句麗・渤海シリーズのしめくくりとして、5月末から6月初めにかけ、高句麗や満州国の歴史を学ぶ8日間の旅行を行いました。旅行地が高句麗や渤海の故地であっただけでなく、日本も日清や日露戦争、そして満州国の設立などで係った地域だけに見るべきポイントがたくさんありました。

参加者は、解説の九州歴史資料館長の西谷正先生や

～5月27日～6月3日～

日比谷高校教諭の武井一さんを含め24人で、広大な中国東北部（旧満州地域）を西から東までバスと飛行機を使って縦断してきました。西谷先生には高句麗・渤海の遺跡を解説してもらう一方、武井さんには日清、日露の戦争から満州国の成立そして崩壊までを語ってもらうことができ、充実した旅行となりました。以下に、旅行のスケジュールと参加者の感想文等を列記します。

| | | | | | | |
|---|------|-----|---------|---------------|--------------------------------|-----------------------|
| | | 名古屋 | KE 752 | 9:25 | 中部国際空港発 | ソウル経由にて KE869 13:00発 |
| 1 | 5/27 | 大連 | 専用車 | 13:20 | 大連国際空港着 | 金州の大黒山山城(卑沙城) |
| | (日) | | 宿泊 : | 金州／金州賓館 | 大連市金州新区斯大林路52号 | |
| | | 金州 | 専用車 | | 金州発～普蘭店・吳姑山城(巍廟山城)～旅順 | |
| 2 | 5/28 | 大連 | | | (日露戦旧跡) 東鶏冠山・二〇三高地・旅順港・旅順駅 | |
| | (月) | | 宿泊 : | 大連／大連パールホテル | 大連市勝利広場8号 | |
| | | 大連 | 専用車 | | 大連市内・大連港・中山広場・旧ロシア街・旧満鉄本社・社宅 | |
| 3 | 5/29 | 瀋陽 | 列車T5305 | 12:42 | 列車にて 瀋陽へ | 16:48 着後、市内へ |
| | (火) | | 宿泊 : | 瀋陽／瀋陽グロリアプラザ | 瀋陽市瀋河区北駅迎賓街32号 | |
| | | 瀋陽 | 専用車 | | 瀋陽～撫順(高句麗新城・漢玄?郡遺跡)～桓仁(上古城子積石塚 | |
| 4 | 5/30 | 桓仁 | | | ・下古城子城跡・桓仁五女山博物館・五女山城遠望)～通化 | |
| | (水) | 通化 | 宿泊 : | 通化／東方ホリデインホテル | 通化市新站路16号 | |
| | | 通化 | 専用車 | | 通化発～集安(好太王碑・太王陵・五号墓・將軍塚 | |
| 5 | 5/31 | 集安 | | | | 丸都山城・貴族墓群等) |
| | (木) | | 宿泊 : | 集安／集安香港城ホリデイン | 集安市黎明南街22号 | |
| | | 集安 | 専用車 | | 集安発～通化経由～長春(市内旧関東軍司令部・ | |
| 6 | 6/1 | 長春 | | | | 偽満州國務院外觀・省鉄路局など) |
| | (金) | | 宿泊 : | 長春／長春中日友好会館 | 長春市自由大路4288号 | |
| | | 長春 | 専用車 | | 長春偽満州皇宮博物館・省博物館 | |
| 7 | 6/2 | 延吉 | CZ 3605 | 14:35 | 延吉へ | 15:25 着後、延吉博物館・延吉公園など |
| | (土) | | 宿泊 : | 延吉／延吉大洲酒店 | 延吉市鐵北路439号 | |
| | | 延吉 | 専用車 | | 城山子山城(旧渤海国の女王の城)～延吉國際空港へ | |
| 8 | 6/3 | ソウル | KE 826 | 12:05 | 延吉國際空港発 | 15:30 仁川國際空港着 |

高句麗・旧満州国紀行を終えて

会員 中林速雄

4年間続いた日韓交流史講座の最後の現地セミナーは、まだ訪れたことの無い中国東北部、旧満州なので、殊の外楽しみだった。

中部空港から乗り換え地・仁川までの大韓航空機で、一行20人あまりが全員ビジネスクラスに振り替え搭乗となったのは、思いがけない幸運だった。白状すると、これまでエコノミー以外は乗ったことが無く、初めての経験。なるほど楽だわいとニヤニヤ。これがヨーロッパあたりまでだといいのにね、とお喋りも弾んで2時間があつという間に過ぎた。

大連空港からバスで金州に。高句麗の典型的な山城の址を見る。解説で同行は、九州歴史資料館館長の西谷正先生と、毎回一緒の若手韓国研究者の武井一先生。西谷先生は、お話の明快さもさることながら、誰もが感嘆したのは、その健脚ぶり。山道をスイスイと進んで、いつも先頭を歩いている。冗談まじりに仰ったが、教壇に長年立つてると、座るより立つ方が楽なんですよ。山歩きは考古学者なら誰でもすることですから、だそうだ。



呉姑山城跡の寺

バスには大連旅行社の石其連さんが同乗、旅の最後まで付き添って面倒を見てくれた。後藤さん達有志が数年前一度この地を廻った時、その誠実さに感心して、以来必ず指名しているそうだが、ナルホドと肯ける

粉骨碎身ぶりを、達者な日本語を駆使しながら見せてくれた。なにより、各地のホテルでちょっとした不都合不具合が続出したものだから、その都度駆けずり廻ってくれたものだった。謝謝！

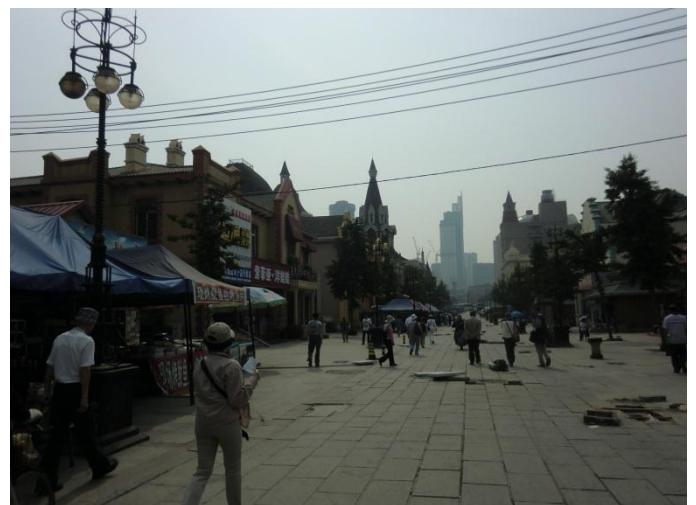
二日目、取って返して旅順へ。二〇三高地に登る。ドラマ「坂の上の雲」の記憶が新しいので、現地に立つ感慨も一入だ。ロシア軍の陣地や塹壕の跡もよく残されていた。旅順では刑務所の見学もあった。日俄監獄旧舎と云われてもピンと来なかつたが、ここは、ハルビン駅頭で伊藤博文の暗殺に成功した、あの安重

根が収容され絞首刑に処せられた所だった。その独立した棟から次の棟に移ると、そこは死刑囚慰靈の展示室。監獄の外に運び出され、林の中に埋められる様子が壁一面に描かれ、正面には戦後地元の農民によって掘り出された白骨が、籠に入ったまま積み重ねられ展示されている。背景は林の丘。ドキッとしたのは、ずっと上に黒犬が一匹描かれていること。まるで、埋められた死体を掘り返そうとしているような不気味な様子だった。これは事実を伝えているのか。広い部屋の中央には机上一杯の花束。自然に合掌し、瞑目した。



旅順・ロシア軍の塹壕跡

三日目、大連市内に残る満鉄本社や社宅、ロシア人街などを見て廻った。高句麗の遺跡では無いが、日本人には見逃せない旧跡だ。それにも空がドンヨリしている。霧か霞か靄かと、気象用語談義に花が咲いたが、林立する煙突から出る煙を見ると、どうも日本ではもう聞かなくなったスマogグらしい。何しろここは大工業地帯、人口800万、中国第4位というから、日本に倣って早く澄んだ空気を取り戻してほしいものだ。春先これに黄砂が加わったらどうなるのだろう。



大連市内・ロシア人街

大連からは列車で瀋陽（昔の名は奉天）に向かい、四日目はまた何ヶ所か城跡や古墳を見たり、博物館に入ったり。

五日目は通化から集安へ。途中待望の広開土王（好太王）碑に対面した。写真やテレビで何度も見てはいるが、やはり実物は迫力がある。見上げる高さの黒光りする自然石の全面に漢字が隙間なく彫り込まれている。しかしこの目で見る限り、ハッキリ読める字は少ない。久しく地上に放置されていたというこの碑を調査した日本陸軍酒匂大尉の拓本で、殆どは読めるのが幸いだが、一つ不思議に感じたのは、石の前面後面共、磨き上げてはいないこと。前後に比較して薄い左右はきれいに磨いているのに何故だろう。盛り上がった部分では斜面に彫っている。

それはともかく、王陵や將軍塚などもあって、最盛期の高句麗の勢いを偲ばせてくれる。北朝鮮全土を超えて南は韓国北部、北は満州、沿海州に広がった大国が、三韓統一を果たせず百濟に続いて滅んでしまった歴史を想う。

集安は鴨緑江沿いの都市。夕方近く河岸に立つと、中洲を隔てて目の前に「北」の山並みが迫っている。向うの河岸近くに白い壁の平屋が数軒並んでいるが、1時間以上経っても人の出入りは全くナシ。窓も閉めっぱなし。とにかく人の気配が感じられない。川の上流に1本立っている巨大な煙突からは、白い煙が絶え間なく上っていた。なんでも銅の精錬工場があるそうで、その所為で、山は大半禿げているという話。

六日目は、6時間かけて長春に向かった。車中で女性陣がせっせと俳句を詠んでいる。

時恰も田植えの真っ最中。大陸にしては一枚一枚の田んぼが小さく、まるで千枚田を横にしたよう。耕運機は見かけず、腰を屈める手植え姿が懐かしかった。

長春は元の新京。街に入ったら大変な渋滞で、そこに柳やポプラの胞子が雪のように降り注いでいる。



ここは満州国の首都で、皇帝溥儀の宮殿がそのまま残っている。看板は「偽満州皇宮博物館」。幼くして清朝のラストエンペラーとなつた溥儀は、中華民国

成立後もどういう経緯かもう一度皇帝の座に着くが、たった12日でその称号を剥奪される。そして日本に担がれて満州國皇帝に。三度目も14年しか続かなかった。中華人民共和国では刑務所生活。特赦で北京市民として暮らし余生を送った。



日本軍司令官と対談する溥儀(人形)

七日目、延吉が最後の訪問地。郊外には数ヶ所あつた渤海の都の一つが一面の田の中に城壁や、土壘の痕跡をよく残していた。

延吉に近い龍井の街はハングル文字が溢れていて韓国に居るような雰囲気を感じさせる。ここには、詩人尹東柱（ユンドンジュ）を記念する碑と部屋が中学校の敷地の中にある。モノ知らずの私は初めてその名を知った。治安維持法違反で収監された福岡刑務所で若くして死んだ愛国者として、韓国ではその悲痛な叫びの詩文がよく知られているそうだ。私も日本語訳を読もうと思っている。

八日目は、渤海国の女王が住んだという城山子山城を訪れた。火山の山頂に城壁を巡らしたような地形で、中の平らな部分に王宮があったようだ。折悪しく雨になり悪路がバスを阻んだため遠望するに留めたが山と川に囲まれた立地がよく分り充分な収穫だった。寸暇を惜しむように山城の跡を見終わって空港へ急いだ。



こうして旅は終了。次はどんな旅行が待っているのか楽しみだ。

高句麗を旅して

会員 後藤和晃

6年ぶりの中国東北部への旅、初日は遼東半島先端の高句麗山城を訪ねることになっていた。

遼東半島は、中国側からせり出している山東半島と渤海をへだてて向かいあっている。この半島ほど多くの民族の血潮を吸い取ってきた地域は、世界にも数少ないのではないかと私は思っている。古代では大中国と東アジアの諸民族が数限りない攻防を繰り返し、近現代では日本も、またここで日清戦争、日露戦争を斗かい、幾十万もの死傷者を出した歴史を持つ。

まず目指したのは半島の先端部を空から睥睨しているかのような大和尚山。その主峰から左右に伸びる尾根と、その間の谷間を包みこむように城壁が築かれていたとされる。この城が大中国の軍を最初に迎え撃つ高句麗の大黒山山城だった。



大黒山 山城

高句麗の山城は険しい山の中腹に、鉢巻をするように高い城壁をめぐらす形式だが、水の確保のため水量豊かな谷間を必ず取り込んでいるのが特徴だ。断崖の上に城壁をめぐらすような部分に比べ、谷の出口は平坦で外敵が侵入し易い地形だ。このため、高句麗山城は、谷の出口に堅固な甕城と称する逆U字形の城門を築いた。甕城とは、日本でいう枠型や虎口のことで、外敵が近づいたら三方から弓矢を浴びせられる構造になっていた。

高句麗は、渤海と黄海に向って突き出しているこの半島に、山城を驚くなれ 60ヶ所も築いて、漢や隋、唐など大中国の軍隊に立ち向かったという。どれだけの人力と経費を費やしたのか！？想像を絶するほどの闘争心、執着心がなければ、これだけの山城を造築することは不可能だったろう。韓国・朝鮮の人々が今も見せる（目標を見つめ、まっすぐに突き進む姿勢や激しい闘争心）はこの頃から民族性として培われてきたものだろうか？

遼東半島を後にした私たちは、瀋陽から撫順を経て、漢帝国が満州方面を支配する出先機関としていた第二次玄菟郡遺跡を、遼寧省の永陵に訪ねた。テレビドラマ「朱蒙」では漢の玄菟郡の太守は、高句麗などの発展途上の諸民族に対し、強権的に振舞う悪役として描かれていた。少数民族を弾圧する時には全身を黒い鎧で覆った鉄騎兵の軍隊を、ためらいなく出動させるなどの姿が描かれていたが実際は、どうであったろうか？



第二玄菟郡城跡は畑の中に

第一次の玄菟郡は今の集安の国内城の位置に置かれていたという。ところが高句麗はじめ様々な少数民族の動きが激しくなり、集安から永陵へ、さらに撫順へと西へ西へと追いやられていったようだ。玄菟郡の太守も、なかなか気が重い役職だったかもしれない。

4日目、私たちは高句麗の始祖、朱蒙がここで国を開いたという卒本の地を訪れた。天を突くかのように屹立するのが五女山城、朱蒙が築いたとされる難攻不落の山城だが、その周辺の大地が卒本だという。



卒本から五女山城を仰ぐ

当時の平城は、下古城子城跡という名の農村に姿を変えていた。同行の有我氏が卒本の風景に大感激していた。無理もない。有我氏は韓国の史書、桓檀古記の記載をもとに、この土地にいた卒本扶余族が半島を南下し、伽耶地域の一画に安羅・多羅という二つの国を建て、その一部は古代日本に渡ってきたと考えているからだ。

（後掲の有我氏の寄稿文は大変興味深いので、ぜひお読みください。また石割さんの寄稿文も半島と倭の関係に興味深い視点を提供しており、こちらも一読をお願いします。）



卒本川の流れと五女山城

さて、五女山城を遠望しつつ高句麗の第二の都となつた集安（当時は国内城と呼んだ）に入ったのは5日目。集安については次の伊藤みつ子さんに書いてもらうことにして、集安郊外の遺跡、丸都山城にからんで、ある人物の物語だけをお伝えしておきたい。



丸都山城

その人物の名は高句麗16代の故国原王である。故国原王は342年、急激に勢力を膨張させてきた鮮卑族5万の大軍に攻め込まれる。戦略を誤って王は大敗して逃走、一方丸都山城に立てこもっていた王母や王妃、それに先の王の遺骸まで侵略軍に奪い去られる。

やむなく王は、鮮卑族の前に膝を屈して王母の返還を哀願するという恥辱を味わう。

さらに彼は371年、平壤に攻め込んできた百済の近肖古王との斗いで、流れ矢に当たって無念の戦死を遂げてしまうのだ。（この戦いに勝った近肖古王こそ、大和の王に七支刀を送り、倭との友好を深めようとした人物だった）

このように342年、371年と凶事が続いた高句麗だが、その20年後には、広開土王が即位、高句麗の版図を南はソウルの漢江、北は満州全域に広げる活躍で、高句麗の全盛期を迎えることになる。

なお、高句麗に関する遺跡として、永稜に第二次玄菟郡遺跡を訪ねたが、すぐ近くの新賓という地域が清王朝を打ち立てた満州族のヌルハチの故郷だった。新賓は朱蒙が建国した卒本にも近い山また山に囲まれた狭い一画だった。この狭い故郷を飛び出したヌルハチは、まもなく明の100万の大軍を破って中国の覇者となる。



旧満州の山岳地帯の中から、高句麗も清も国を起し、黒雲が湧き上がるよう恐ろしい勢いで、国を強大化させていった。この地域が生んだ勢力がなぜ大中国の100万、200万という大軍隊に日々と打ち勝ち、漢人たちに後々まで恐怖心を植え付けることができたのか？その秘密をさらに探ってみたいと思った8日間だった。

ドラマ「太王四神記」から見た世界遺産の町「集安」

会員 伊藤みつ子

歴史ファンタジードラマ「太王四神記」によると、広開土王として国土を拡張したタンドクはその出生から神話めき知略に長けた英雄として奉られている。集安では、先ずこの神話にまつわる四神の壁画が描かれている五盤号五号墳を訪れた。羨道の奥にある玄室、資料によれば長さ356cm幅437cm高さ394cm。四壁には上下3段に配置された蓮華火炎文を地文として、それぞれ玄武・青龍・白虎・朱雀が描かれており、朱雀は左右一対。雨を操る力を持ち北方の地と民を守る玄武、雲を操り東方を守る青龍、風を操り西方守の白虎、火を操る朱雀、まさに幻想的な世界に浸っていると偶然なのか雷鳴が轟き、我に返る。この四神に纏わる壁画は日本の高松塚古墳にも見られるもので古代日本と高句麗の関係をも物語っているよう。続いて、好太王碑や將軍塚も見学。好太王碑はその業績を称えるため息子の長寿王によって建てられた墓碑で1775年に及ぶ碑文中には当時の日本を示す倭国に関する記述も見られ日本史を知る上でも貴重な資料という。

太王陵を出ると「アンニヨンハセヨ!」。思いがけないハングルに、一瞬、祖国に帰ったようななつかしさが。起亜自動車の社員研修団体に出会う。こんな所で「マンナソ パンガッソヨ!」と一時、韓国語で盛り上がる。そういえば前日、朱蒙が建国した五女山城を遠望後、



五女山城・ビュースポットにて

上古城子墓群を訪れた時、幼少期を京都で過ごしたという初老の男性が何と電動車椅子で単身駆けつけ、私達に話しかけたのにも驚いた。近所で日本人団体が見学に来ている、という噂を聞いたそうで。達者な日本語で嬉しそうに話す老人に私達も歓迎の拍手で応え、握手して別れを惜しんだ

ドラマでは国内城内で様々なシーンが登場していたが、本物の国内城址は広大。国境の鴨緑江近辺からも城壁の積石塚が見えた。集安市民はまさに世界遺産遺跡の中で暮らしているようなもの。



この国内城は平地に有るが、戦闘時の避難先山城としての丸都山城址へ。鶯や閑古鳥が囀り合い、雅なるアケビが咲き誇り、城からは国内城が望めるという絶景の山腹。思わず見とれて下山が最後尾に。帽子を深く被っていた私。足場の悪い所で手を差し伸べて下さった方がいた。「すみません!」と遠慮なく手を出したところ、なんと西谷教授。ファヌンのような優しいお気遣いに恐縮しきり。手袋をしていたのが悔やまれた。



古里大連

会員 山本玲子

中国旅行は六回目になりますが、故郷大連を訪れるのは今回で三度目となりました。勿論両親の写真持参です。満一才で引き揚げてきたので何一つ覚えているはずも無いのに懐かしいです。毎年十一月三日は父の開業記念日でした。その日は家族五人が大連の思い出話をする日でしたから、何度も同じことを耳にして、私は知っている様な気になっているのでしょうか。

六年前もその発展には目を見張るものがありましたが、空き地は全て苗木を育てていて緑が実に多くなっていましたし、公共の場にしかなかった花々が美しく手入れされ、当時はほとんど見かけなかった散歩に連れられる犬が沢山いて驚きました。中国が紛（まご）うことなく世界第一の発展国であることは認めざるを得ません。旧満鉄のマンホールの蓋が大連市のものに替り、当時の日本人住居が取り払われていくのを見るのは寂しくもありました。



大連市内の日本料理店



現在の大連市・マンホールの蓋



大連といえばアカシア。アカシアの花をはじめて見る事が出来、感激でした。引き揚げの大連港も見紛う程整備され、港としての活動の場が他に移っている感じがしました。人間には決して時は留まりはしませんし、留まっていてはいけないのでしょうが、人をとりまく外界、そして事物をもとどまり得ないものだと、しみじみ思うことでした。

大連を訪ねるのはこれが最後になるかと思っています。このネットワークのお蔭で大連の歴史やお話を伺えた事は、私にとって宝物となりました。勉強熱心な会員の方々のお仲間に加えていただきましたこと、心中より有難く厚く御礼申し上げます。

大連港よりの旅立ちかちがらす



故郷“大連”で父母追想

会員 佐藤昭子

6年前の高句麗紀行に続いて、2回目の大連訪問で、アカシアの花が満開の風景を見ることができました。

私は“アカシアの大連”と呼ばれたこの街の一画で昭和13年に産声をあげました。父は貿易会社の社員で母は大連の通信局に勤める官吏の娘でした。2人は、今も残る大連大和ホテルで結婚式を挙げ、やがて私や弟たちが生まれました。



大連市・大和ホテル

父は、まもなく奉天（今の瀋陽）、続いてハルビンへと転勤になり、私たち家族も同行したため大連で暮らした記憶は残っていません。しかし母が結婚するまで暮らした南山六（なんざんろく）の祖父母の家は、母に連れられよく訪問したので、はっきりと記憶に残っています。

南山六には、瀟洒なレンガ造りの日本人の家が並んでいました。近くの鐘ヶ池の周りには、アカシアの並木道があり、初夏になると満開の花々から馥郁とした香りが漂ってきたものです。そんな時、母が「子供のころ、アカシアの花をよく天麩羅にして食べさせてもらったわ！幸せいっぱいの時代だった！」と話してくれたのを思い出します。

東京の上野駅にそっくりの大連駅に再会した時には、昭和20年当時の父の記憶が鮮やかに蘇ってきました。終戦のあと、私たちは不穏な情勢が続くハルビンで、母と子どもたちだけで心細い暮らしを続けていました。それというのも父が召集を受け、大連で軍務についていたからです。ある日、大連にいる筈の父が突然、私服で家族の待つ家に帰ってきました。聞けば父の部隊は、ソ連軍によって大連駅からシベリア方面に強制的に送られる事が決まっていたそうです。ところが、父は大胆にも部隊長に「私はハルビンに戻ってハルビンの家族や日本人一同が無事日本に帰れるよう死力を尽くします！」と訴え、私服に着替え、ソ連兵の目を盗んで脱走して來たのです。ハルビンに戻るまでも機関車に潜り込むなど小説もどきのハラハラドキドキの連続だったといいます。



大連駅

こうして帰ってきた父は、ハルビンから日本に引き揚げる帰国団の副団長となり、住民たちを守りきって無事、日本に戻ってきました。

激動の時代を満州で体験した私の父と母、生きていたらもう一度、現在の大連を見せてあげたいと思いますが、それは叶わぬ夢です。それにしても、大連をはじめ瀋陽でも長春でも中国の人々は“満州國”時代に日本人が建てた建物や施設を巧みに活かして使い続けていました。

その光景を見るにつけて、祖父母や父母の世代が旧満州のために尽くした努力の一端を、中国の人も評価してくれているような気がして、嬉しく思ったものでした。



大連駅前

中国の朝鮮族と出会って

会員 李 純子

今回の中東北部への旅行で、朝鮮族のガイド2人と出会い、本来の祖国を離れ、外国で暮らすことの難しさをいろいろ考えさせられました。

私は日本で生まれ育った在日の韓国女性です。これまで在日韓国・朝鮮人の問題を意識する事はあっても、韓半島以外の国に住んでいる同族のことは全く関心の外にありました。

しかし、国籍は中国、民俗は朝鮮族という形で働いている2人のガイドから話を聞いてみると、私たち在日とは、考え方、生き方、悩みなどの点で、かなり違うように思いました。

最初に出会った朝鮮族ガイドは瀋陽在住の男性ガイド、金慶洙（キム・ギヨンス）さんで2人目はロシアに近い延吉に住む女性ガイドの金香春（キム・ヒヤンチュン）さんでした。2人の金さんには共通した雰囲気がありました。とにかく仕事に熱心な上に日本語が抜群にうまいのです。

男性の金さんは、日本に留学した人なので日本語が上手なのは当然としても、女性の金さんは一度も日本に行ったことがないというのに滑らかな、うまい日本語を話しました。2人とも日本語がうまいだけではありません。地域の歴史、町の現状、人々の暮らしぶりなど話の内容も多彩で、表現力も優れていました。

旅行団の関心に応えようとマイク片手に2時間でも3時間でもバスの中で立ったまま話し続けたのです。身びいきと言われると困りますが、朝鮮族の2人のガイドは他の中国人ガイドに比べ、日本語能力も話の内容も数段、上の印象を受けました。

彼らの旅行団と正面から向いあって、質問には知るかぎり情報を伝えようとする姿勢がすばらしいと思いました。「何事にも全力を尽すのが韓国・朝鮮人だもの！」とガッテンしました。

特に延吉の金香春さんは、これまでガイドとして全く語ったことがないという話題にまで及んでくれました。旅行団の方から“戦前の抗日運動の状況を知りたいが？”という質問が飛んだのです。金さんは「これまで日本の旅行団に抗日運動の話をしたことは一度もありませんでした…しかし御質問がありましたのでー」と詳しく説明してくれました。

戦前、延吉周辺は間島地方と呼ばれ朝鮮人の抗日運動の中心地だったことや、日本軍のゲリラ討伐隊、千数百人がゲリラの待ち伏せ攻撃で全滅した青山里戦斗などを語ってくれたのです。

また高名な抗日の詩人で日本で獄中死した尹東柱（ウン・ドンジュ）の故郷、龍井（ヨン・ジョン）の記念館にも案内してくれました。尹東柱は戦前、京都の同志社大学に留学し詩人としても活躍しますが、

抗日運動をしたとして捕えられ、福岡の刑務所の中で病死した人物です。この尹東柱の記念館では、民族学校や民族の文化を守り伝えてゆくため、来訪者に寄付を求めていました。既に金さんの解説で中国人として生きる一方で、朝鮮語や朝鮮文化を学んだり、伝えたりすることの難しさを聞いていましたので、私はためらいなく日本円で1万円を寄付しました。同行の日本人の皆さんも100元、50元と寄付されていて、胸の中が熱くなりました。



尹東柱 記念館

2人の金さんの生きざまから、中国の朝鮮族も向上心を持ち続けながら逞しく生きていることを実感しました。アメリカやオーストラリアなどにも渡って行った韓国人も、きっと同じように、それぞれの環境の中で生き抜いていることでしょう。私もこれから的人生は、在日にとどまっていた視野をアジア、世界にまで広げていきたいと思った旅でした。



また行きたいところ

会員 岡崎洋子

旅に参加した私の目的は、好太王碑を自分の目で見ることでしたが、山城や壁画古墳や・・・それ以上のものに出会うことが出来、同行の方々にも恵まれ、最高に幸せな旅でした。その上、誕生祝いまでやってもらえるなんて・・・。こうした『高句麗の旅』に関する感想を書き出すときりがありませんが、今回は後藤さんからいわれた“尹東柱など現代史を中心に”感想を書くことにしました。

通化が、1946年2月3日の「通化事件」で多くの日本人避難民が犠牲となった場所であることは頭にあったが、バスから「楊靖宇の陵園」の標識を見るまで、抗日ゲリラのリーダー楊靖宇の墓地がここにあることを失念していた。ガイドさんに聞いてみると、かれの墓所はホテルからそう遠くはない丘陵上にあるということだった。

長春の博物館では、楊靖宇の写真など数枚のパネルが展示されていたが、時間がなく、ゆっくり見ることが出来なかつた。かれの14年に及ぶ抗日の戦いは、哈爾濱の東北烈士記念館に展示されているとのことだが、10数年前に訪れた時は休館日で、見ることがかなわなかつた。

楊靖宇の生涯については、澤地久枝著「もうひとつの満州」(1982年)に詳しいが、その中で通化の陵園を訪れた時のことも書かれている。又、1940年2月23日、日本軍に追い詰められ射殺されたかれの腹の中には、「一粒の糧食すら発見できず、わずかに樹の皮と草の根だけがあつた」ことも記されている。反満抗日ゲリラを組織して戦った楊靖宇、かれと共に戦つた隊員たち(朝鮮族が多い)の陵園に詣でるために、もう一度通化へ行かなければ・・・。

龍井市、若くして日本で亡くなった詩人・尹東柱の中学校訪問という、思ってもみなかつた幸運に恵まれた。1970年代にソウル大学へ留学された西谷先生が、尹東柱の詩で韓国語を習わされたこと、尹東柱の詩を語るおられたことを、あとで伺い、バスの中での西谷先生の説明に納得。

尹東柱の詩と生涯について知ったのは、いつのことだったろう。私が所持している彼の詩集「空と風と星と詩」は、1984年出版となっているが。

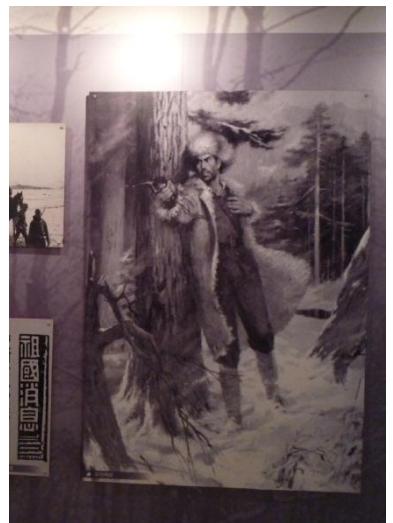


詩人の茨木のり子さんが「20代でなければ絶対に書けない清冽な詩風は若者をとらえるに十分な内容を持っている。(中略)ひらけば常に水仙のようないい匂いが薫り立つ」と評しているかれの詩を、記念館で手に入れたハングルの詩集で読めるようになりたいと思う。

尹東柱と同じように治安維持法違反で検挙され、1938年、26才で没した日本の詩人がいる。かれ楨村浩は「思い出はおれを故郷へ運ぶ。白頭の嶺を越え、落葉松の林を越えて」で始まる「間島パルチザンの歌」の作者だ。高知で生まれたかれは、間島へ行ったことなどない。なのにあたかも故郷咸鏡道から豆満江を渡り、間島へ入って戦っている朝鮮人パルチザンであるかのような詩を書いた。どうしてそんな詩を書くことが出来たのか、学生時代に読んだ時は、そんな疑問すらわからず、その詩の内容に圧倒されたものだ。

今年6月2日、「楨村浩生誕100周年記念の集い」が高知でもたれた。(かれの誕生日は私と同じ6月1日だ。) その会で講演した戸田郁子さんの著書「中国朝鮮族を生きる」の中で、「間島パルチザンの歌」が発表された(1932年)数年後には、舞台である間島地方(延辺)に伝えられていたことが明らかにされている。「間島パルチザンの歌」をたどる旅をしてみたい、と強く思う。

通化、桓仁、集安、延辺・・・また訪れることが出来れば、と願いつつ、そう思える旅にして下さった同行の皆さんに深く感謝し、筆をおきます。



闘う楊靖宇(絵)

今回の中東北部史跡紀行で最も筆者を旅に駆り立てたのは、好太王(国岡上広開土境平安好太王)碑を始めとして高句麗の故地や遺跡を巡り歩くことでした。この目的は西谷先生を先頭にして遺跡を訪ね、また資料をもとにした熱心な案内を拝聴して十分に満足させられました。以下今回の紀行で納得した事、つまりこの紀行の収穫を述べさせて頂きます。

・高句麗(鄒牟・東明・朱蒙)から倭(祇・積)へ

西谷先生の資料には「朱蒙」の一場面が挿絵として載っています。筆者は挿絵を通して好太王碑を見学して、高句麗と倭國の神話に繋がりを見つけた(と思う)のです。

佐伯有清著の「七支刀と広開土王碑」によると碑文の冒頭にこうあります。『惟(こ)れ昔、始祖鄒牟王の創基なり。北夫余自(よ)り出づ。天帝の子(天孫:著者注)にして、母は河伯の女郎なり。・・・』ここで言う『鄒牟王』とは三国史記・高句麗本記に言う東明聖王・朱蒙なのです。この神話の思想は百濟に伝わります。三国史記・百濟本記の始祖条に『百濟の始祖、溫祚王。其の父は鄒牟。或いは朱蒙という』とあることで分かります。筆者は鄒牟・東明・朱蒙が百濟を通じて日本の神話に出てくる大山祇あるいは大山積となって伝わったと考えます。それは、岩波書店発行の日本古典体系・風土記の伊予国(逸文)にある御嶋(大三島)についての次の文章で明らかです。

『御嶋 伊豫国の風土記に曰く、乎知の郡。御嶋(みしま)。坐(いま)す神の御名は大山積の神、一名は和多志(わたし)の大神なり。是の神は難波の高津の宮に御宇(あめのしたしろ)しめし天皇…仁徳天皇…の御世に顯れましき。此神、百濟の國より渡り来て、津の國の御嶋(みしま)に坐しき。云々。御嶋(みしま)と謂うは、津の國の御嶋(みしま)の名なり。积日本紀卷六』

・・・大山積と大山祇とは同一神。大山祇神社ではご神体には大山積をつかう。・・・

高句麗の(鄒牟・東明・朱蒙)と倭の(祇・積)どのように発音されていたのか明白にはならないが、[T U M] が語に含まれている事から推論しました。

・風水の遺構をさぐる

集安の好太王碑を感激して見た。次に、好太王墓の候補地を見学する予定で其の地へ向かった。そこでは王墓の候補を見る時間がなく、五盤墳五号墓の壁画古墳を見学しました。筆者はかつて(1972年頃)韓国の百濟武寧王陵をひょんな機会から単独で内部へ入れてもらったことが有るが、今回はそれに勝るとも劣らぬ緊張と感激の拝観となりました。羨道のような道を導かれて中へ入ると4~5m角の広さで、壁面は3mほど立ち上がり更に3m程度の持ち送りで頂上の石櫓に至

ります。照明が十分ではないのでそこに描かれた図ははつきりとは見てとれないが、蓮の華の文様と何やら仏画のような絵が壁面にびっしりと描かれています。そこで筆者は薄明かりの中で四神図を探した。資料にある玄武・青龍・白虎・朱雀を見つける事が出来ました。感動しました。

ここで一つ納得した事があります。この頃、つまり3~4世紀には高句麗に儒教が根付いていたという事です。地相を觀る風水の思想も儒教の一環です。そこで丸都山城の遺跡を想い返します。三方を山に囲まれて一方を開けています。ほぼ中央の辺りに点将台があります。これらの関係を「朝鮮の風水・朝鮮総督府編」に少し加筆した風水の概念図と比較してみて下さい。

この図は女陰を表しているようですがそれについて記紀に思い当たる文言があります。第3代、安寧天皇の御陵が古事記では『歛火山之美富登也』、日本書記では『歛傍山南御陰井上陵』となっており、何れも歛傍山の陰部に当たる所に設けられたことが記されています。これは日本の記紀の時代に風水の思想が影響を与えていた証拠と考えて良いと思います。

・幻の辰国・辰王朝を探す

中公新書のNo. 147は江上 波夫著の「騎馬民族國家」です。1991年11月30日の改版版「あとがき」に、初版には無い、辰(シン)王朝について著者の考えが示してあります。そこでは白村江の戦いで唐と新羅の連合軍に敗れ、唐へ拉致された百濟の最後の王、夫余隆の墓誌銘に『公、諱名は隆、百濟辰(シン)朝の人なり』とある事を発見したと述べています。辰王朝は南部朝鮮つまり馬韓の月氏国に都し馬韓・辰韓・弁韓内の十二国を服属していたと言っています。また、隋使・裴世清の紀行文に残っている「秦(シン)王国」は大和国に違いないとしています。そして百濟王家・加羅(任那)王家・倭国王家は高句麗王家の系統を引く辰王家の一統と結論しています。また最近、上田 雄・孫 栄健は著書「日本渤海交渉史」・六興出版の中で渤海国王が天孫を名乗り源が高句麗に発する事と初代国王大祚榮は当初震(シン)国王を称していた事を述べて、渤海国も辰(震・シン)王朝を自認していたのではないかとしています。

辰王朝については謎の部分が多いが古代朝鮮には国名に「シン」の付く国が実は幾つか在ります。それを挙げると、辰(シン)韓・弁韓=弁辰(シン)・新(シン)羅(シラギと読むのは倭言葉、シンラ=シッラと読むべき)・震(シン)国があり、更に筆者は任(シン:漢音)那伽耶を挙げます。・・・任那を「ミナナ」と読むのは倭言葉で当時の任那伽耶から渡來した人が祖国を「御(ミ)馬(マ)那(ナ)、つまり(辰王朝の在る)馬(マ)韓のお国」と呼んだものと考えます。また、任那を

「ニムナ」と読んで、これが「ミマナ」に変化したという説には無理があると考えます。…草原の中、渤海国の五京の一つ中京顯徳府の遺跡とされる広大な西古城のほとりに立って、「騎馬民族国家」説を一度考え直す必要があると思いました。

・烽火(とぶひ=狼煙：のろし)の源流を求めて

ツアーの間、添乗員・運転士・ガイド・街を歩く人々みな携帯電話を使っています。中国国内の通信網は今や遍く張り巡らされたと思われる。翻って高句麗・渤海の時代を考えてみよう。広大な国内に情報をもたらすのは烽火しか無かった事だろう。通化市と集安市の道(約 85 km)を考えてみると数ヶ所の烽火台があったと思われます。私たちが見学した清河の集安市寄りの関所の辺りでは道は両側の山が迫っており烽火の中継点には最適地と考えられます。バスの車窓から広い原野や山を眺めながら烽火の事を考えましたが残念ながら確証は得られませんでした。

一方日本国内では、烽は古代においては有力な通信手段であったのです。今日ではその具体的なことを示す形跡は殆ど何も残されていません。筆者は日本書紀にある「壬申の乱」の事を想もった。

672(壬申)年 6月 24 日、大海人皇子は近江方を撃つべく軍を起して吉野を発って東へ向かった。伊賀から鈴鹿の山道を通り伊勢の国を北上し美濃の国を経て不破の道を越えて 28 日には和氷(わぎみ=関が原)に至ります。そして近江に着いた後いくつかの戦いがあり、7月 23 日天智天皇の子、大友皇子の自殺をもってこの乱は終わりを告げます。数千から万人にも及ぶ軍隊(騎馬隊であろう)を率いて道を進むわずかな間に援軍の合流や応援を指示したりしています。これらの情報のやり取りは烽火(とぶひ)が介在していたと考えられます。烽火が使われたことを想起させる遺跡として四日市市内に「天武天皇迹太川御遙拝所」があり、そこには「天武天皇呪志(のろし)の松」があります。放火が盛んに行われていた証として 757 年に施行された養老律令の「軍防令」には、烽の距離(40里・・約 21 km)、管理体制、材料などが規定されています。

以上 4 点、印象に残った事を紀行文とします。一読くだされば幸いです。

最後になりますが、今回のツアーの後藤団長を始め世話をしてくれた鈴木さん・伊藤女史、つねに有益な情報を与えてくれた西谷・武井先生には心から感謝の意を表します。

このたびの高句麗（+渤海）遺跡視察は、当会が2009年以降行ってきた加耶、百濟、新羅遺跡見学会に続くものです。これら4回のツアーは、いずれも数ヶ月かけて質の高い事前研修を行った上で現地を見るという実に念の入ったスタイルで実施されてきました。そして今回の視察は、相手国の歴史と文化を知ってこそ真の交流ができるとの信念に基づいて行われてきた「日韓交流史講座の総仕上げ」とも言うべきものであったと思います。その一端は、中国の国賓待遇である西谷先生に八日間にわたって直接ご引率していただいた事や、配付された大変詳細な資料を一瞥しただけでも、この研修にかけるプランナーの高い志と意気込みや情熱がひしひしと伝わってきます。私にとっては自己の推論を固める上で大きな糧となりました。冒頭において、この様な内容の濃い研修に参加できた事に深く感謝とお礼を申し上げたいと思います。

私は、濃尾平野の古代像を追求していく中で、古代の当濃尾地域が協調した原初の大和政権像を先住蛇神信仰（海彦：海洋：太陽信仰：兄）族と渡来系牛神信仰（山彦：遊牧：月星→北辰信仰：弟）族の合同政権と判断するに至りました。そして、この3年間の交流史講座を経験することによって、様々な歴史的事象と各種神話を総合的に勘案した上で、この合同体において統治的立場にあったのは、安羅・多羅の兄弟族であったという確信をより一層深めました。

この二族については、在野の書ではありますが桓壇古記（高句麗本紀第六）に「多婆羅一稱多羅韓國自忽本而來」「多羅國與安羅國同隣而同姓」とあります。つまり、忽本（=卒本）から来た多（婆）羅族は安羅族と同姓でいつも隣合わせの関係にあるという意味です。両族由縁の関係地名が、現代の列島各地においてもまさに隣存しているのは、実に興味深い事実です。そして、日本神話の神武東征譚において、神武が長髓彦に同じ天孫（=渡来）族である証として天羽羽矢と歩鞍を示すシーンが私の脳裏には浮かんできます。長髓彦と合同政権を作ったニギハヤヒと東征してきたイワレヒコが安羅族・多羅族という兄弟関係にあったという前提に立てば、この話はすんなりと理解できます。なお、尾張国一宮真清田神社祭神の天火明命は、天橋立沖の冠島に降臨したという伝承がありますが、このあたりには新羅王を生んだ多婆那（→丹波）国があったと言われています。そうすると、卒本、多羅（+安羅）、丹波、尾張そして新羅（斯羅）が見事に一本の線上に乗ってきます。さらに製鉄系遺跡、前方後方墳の分布、天日槍、都怒我阿羅斯等、日子坐伝説などを総合的に考えると、丹波と濃尾の古代における密接不可分な関係が浮かび上がります。半島を南下した広開土王以前から新羅と卒本がこのように有縁であったとすれば、石村洞の方形塚に高句麗（より正確には卒本扶余）文化の影響が見て取れるのと同様に「積石」文化の土壤が韓半島東南部にも紀元前後からすでにあったと見る事もできます。

卒本（現在の遼寧省本溪市桓仁満族自治県）扶余族の地は、韓流歴史ドラマ朱蒙では召西奴（桂婁：高句麗王）族の根拠地として登場しますが、紂升骨（卒本、五女山）城が建設された高句麗建国の場所ですから、今回の視察におけるメインスポットでもあります。列島においていわゆる「高句麗」系と言われる遺跡の数々も「卒本扶余」系と置き換えてみると、古代史の謎が色々と解けてくるようにも思えます。出雲などの四隅突出型墳丘墓の展開もこの視点で再検討してみたいものです。



五女山城の周辺が卒本だった！

上記のような視点に立つ私にとっては、高句麗（卒本扶余）族の遺跡にスポットを当てた今回の視察研修は、必然的に正鶴を射るものとなり、数多くの知的収穫を得るとともに私見について一段と確信を深める大変意義深いものとなりました。

集安の積石塚群、国内城、丸都城、驚異的な発展を遂げている中国の姿、Sさん、Yさんとの弥次喜多道中、感動的な職業人生を聞かせていただいた車中隣席のOさん、Sさん、お世話になった通訳の方々、食事のことなど具体的に書きたい事は山ほどありますが、紙面の都合上残念ですが割愛いたします。上記文章で当視察研修に対する私の感動が伝わる事を念じて筆を置きます。また皆さんと再訪できる機会があればと思いますし、前方後円形の積石塚があるという北朝鮮の雲坪里、松岩里も一度直に見てみたいものです。



集安の積石塚群

あけび咲く

伊藤みつ子



丸都山城・宮殿址より国内城を望む

金州を望む山城夏霞
アカシアの香に手を伸ばし蜜をすふ
こうらいの苗植ふ高句麗発祥地
国内城望む山城あけび咲く

閑古鳥啼く国境の鴨緑江

アカシアの花
佐藤昭子
ほの甘きアカシアの花父母偲ぶ
雷に逃ぐる講師や五号墳
もろこしの苗跨ぎ行く遺跡かな
七段の将軍塚に草萌ゆる
尹東柱の母校に詩碑や柳絮舞ふ



集安市・將軍塚



好太王碑

卑沙城へ登る黄沙をふりかぶり
花アカシア担ぐ柩の紅錦
鴨緑江こえて飛び交ふ夏燕
太王碑に倭の文字さがす緑雨かな
日のささぬ溥儀の仏間や夏の冷え

緑
雨

高橋孝子

山本玲子



鴨緑江（対岸は北朝鮮）

貨物車の長き汽笛や夏夕陽
雲ぐもり河原に赤き牛ねまる
集安へ花アカシアのつながれり
北朝鮮鴨緑江に柳絮とぶ

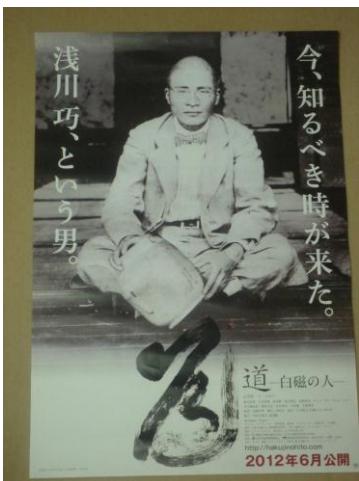
落日は国境のはて桐の花



高句麗・旧満州国紀行 参加者一同



今月のトピックス



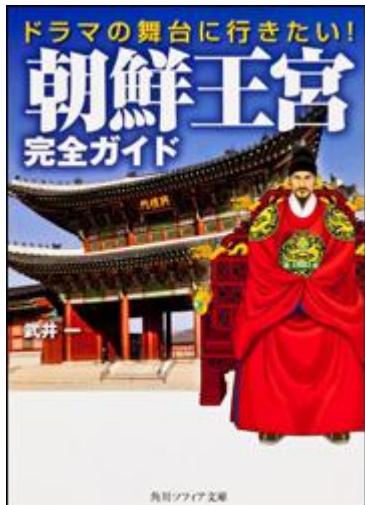
日韓合作映画「道～白磁の人～」

京都在住の映画評論家ホームページ 源ちゃんの見てある記より

● 「道～白磁の人～」 ☆☆☆☆

主人公の浅川巧は全く知りませんでしたが、史実に基づく展開で見応えは十分。日本による韓国併合下の朝鮮半島で、このようなドラマがあったとは、驚きです。日韓相互理解への道を示した秀作で、あふれる涙を抑えることができませんでした。

すでに一般上映は終了しているようですが、再度鑑賞できる機会を持ちたいと事務局でも考えています。



ドラマの舞台に行きたい「朝鮮王宮」完全ガイド

日韓交流史講座・主任講師 武井一先生ご執筆の単行本が角川ソフィア文庫から出版されました。

この本を開いてみたら、武井先生の講義を思い出しました。90分のお時間きっちり、テーマを基にあらゆる角度から余すことなく、惜しみなく、面白く、深く、こんな所まで? 単行本なのに内容はぎっしり。私が歴史ドラマにはまっていいるからかも知れませんが、とにかく面白いの一言です。

ぜひ、ご一読ください。

「第28回韓日歴史・文化フォーラム」開催のご案内

日 時 : 2012年7月4日[水]18:00 開演
講 師 : 金住則行氏 小説「李藝」著者
益田裕美子氏 映画「李藝」プロデューサー
会 場 : 愛知韓国人会館 5F 大ホール
〒453-0013 愛知県名古屋市中村区亀島1-6-2
地下鉄東山線亀島駅③番出口徒歩1分
会 費 : 500円

朝鮮王朝初期の外交官「李藝」は、朝鮮通信使の始祖とされ韓日交流史に大きな足跡を印した人物ですが、日本ではありません。今回の講師である金住則行氏は、李藝の直系の子孫にあたる李昌烈さんから「倭寇に拉致された母親を探そうと外交官をめざした孝道、日本に拉致された同胞667人を連れ戻すための決死の努力と忠義心」の史実を聞き、「文武両道の新たなヒーローの誕生」に胸をときめかせ、小説「最初の朝鮮通信使 李藝」を描かれた。金住則行氏には日韓の交流の道を開いた李藝の生き方と、これから日の韓交流、発展の思いをご講演していただきます。また、小説「李藝」は、日韓合作映画として12月に全国劇場公開を予定しています。この映画プロデューサー益田祐美子氏にもお越しいただき、映画化への情熱と予告映像を交え語っていただきます。

編集後記

我が家の庭でアジサイが咲いています。梅雨時を象徴するお花。あまり手入れが行き届いてはいませんが、時期が来れば花をつけます。まるで雑草のよう。

なんか今回の編集後記は文字数が必要だそうで、すこしアジサイについて書いてみます。アジサイは万葉集にも現れる日本古来からの植物。その中のある種類がヨーロッパの方へ行き、アジサイの英語名ハイドランジア (*hydrangea*) は水の容器という意味だそうです。これ、あるクラシックの演奏会での耳学問。

そして花は咲くと日が経つにつれ、少しずつ色が変化します。最初は緑色がかった薄い青色。そして青っぽくなり、やがて赤っぽくなります。

これは葉で養分を作る葉緑素が作用して薄い緑青っぽいのが、徐々にアントシアニンの作用で青い色が濃くなり、また赤っぽくなります。花の色については土壤成分が強くあり、酸性度とミネラルの度合いによって青色がよりいっそう青くなったり、青色成分は出ずに赤色の花になったりするそうです。以前覚えたミニ知識ね。

そんな我が家の中のアジサイ、編集後記で画像を載せるのもどうかと思うけど、今年のアジサイ、2枚用意しました。晴れの日のアジサイ、雨に濡れたアジサイ。晴雨それぞれで趣がある季節の花です。 『嶽』



高句麗発祥の地で、トウモロコシの苗畑を見かけました。昨夏、我が家の中庭菜園でも 50 本も収穫出来、とっても美味しかったです。住宅地のミニ菜園でトウモロコシは、さすがに珍しいらしく、ご近所からもよく声をかけられます。今年も、もうこんなに大きくなり収穫の日が楽しみです。一度、お試しください。

会報 61 号は、後藤・総括幹事 総合指揮のもと
原稿入力・印刷 (武田章敬)
レイアウト・発送 (伊藤みつ子)
編集確認・折込 (大嶋 明) が担当いたしました。
お楽しみ頂けましたら幸いです。 『蜜穂』